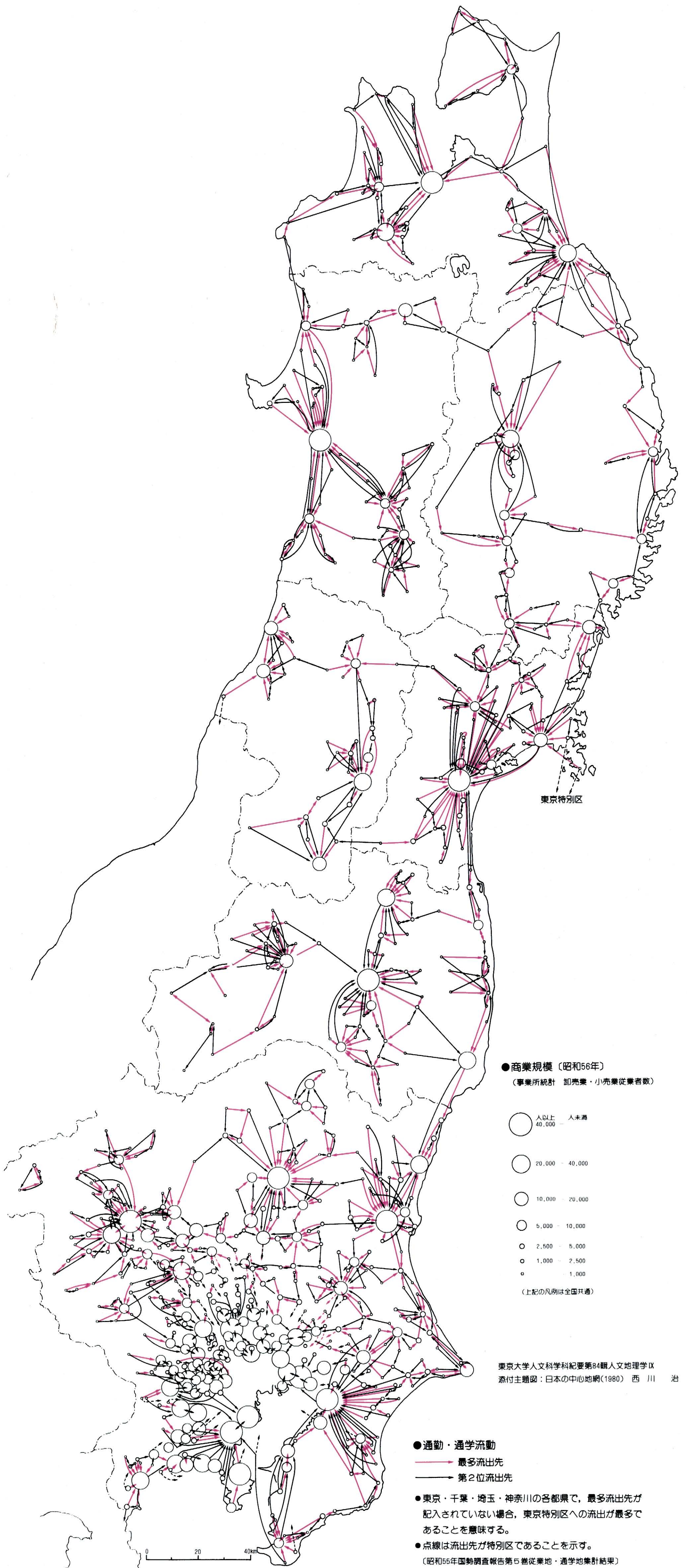


日本の中心地網
4-1
北海道地方の通勤・通学流動図(1980)



東京大学人文科学科紀要第84輯人文地理学Ⅹ
添付主題図：日本の中心地網(1980) 西川 治

日本の中心地網
4-2
東北・関東地方の通勤・通学流動図(1980)



日本の中心地網
4-3
中部・近畿・中国・四国地方の通勤・通学流動図(1980)

都市群の空間システム

西川 治

大小の都市群の配列系、あるいは中心地の重層的空間システムを図示するために、本図では次のような方法を採用した。すなわち、太線(赤紫色)は矢印を向けた中心都市へ、その周辺市町村から最多数の通勤・通学者が流出していること、細線(紺青色)は2番目に多い流出先を示す。また中心都市の円の大小は、その市町村の卸売・小売業従事者数に対応させて、その中心地度 Centrality を代表させた。

普通、通勤・通学統計を用いて大中心都市の勢力圏を表す場合には、その周辺市町村(Fm)から他市町村への総流出者数において、当該中心都市(Gc)へ向う数が一定以上のパーセンテージ(たとえば3-5%以上)を占めるFmをまとめて、その範囲をGeの勢力圏とみなすことが多い。しかし本図では、全国にわたって中心地相互間の結びつき方をなるべく簡明に概観できるように、通勤・通学者の絶対数の順位を採用したのである。

その結果は一見すると、都市群系は複雑な蜘蛛巣状を呈するが、線の太さと矢印の方向とをよく見比べると、各地方における都市群系のパターンにはそれぞれ地域性を反映した特色が認められる。

(1) 東京と大阪の巨大圏域においては、区部へ向う通勤・通学者数が1,2位に多い周辺市町村数は、ざっと百のオーダーに達する。全国を10ブロック位に分けた場合の地方広域都市に対しては、40±α、全国を50台に区分した場合の県域中心都市級(Pc)に対しては、20±αといった概数になる。(市町村合併による中心市域の大小・形状も影響する)。

(2) 巨大都市圏の縁辺都市に分布する中心地(Fc)は、それより外側に隣接する少数の市町村からの最多流入対象となる。一方、Fcからの最多流出先を、内側の中心地を滑り抜けて、直接区部とするものがある。「滑上形」、「トンネル型」。

(3) 巨大中心都市への通勤・通学限界より外側に位置するPcレベル以上の大中心地は、多くの矢印が車輪のように集まる「輻輳型」を示す。

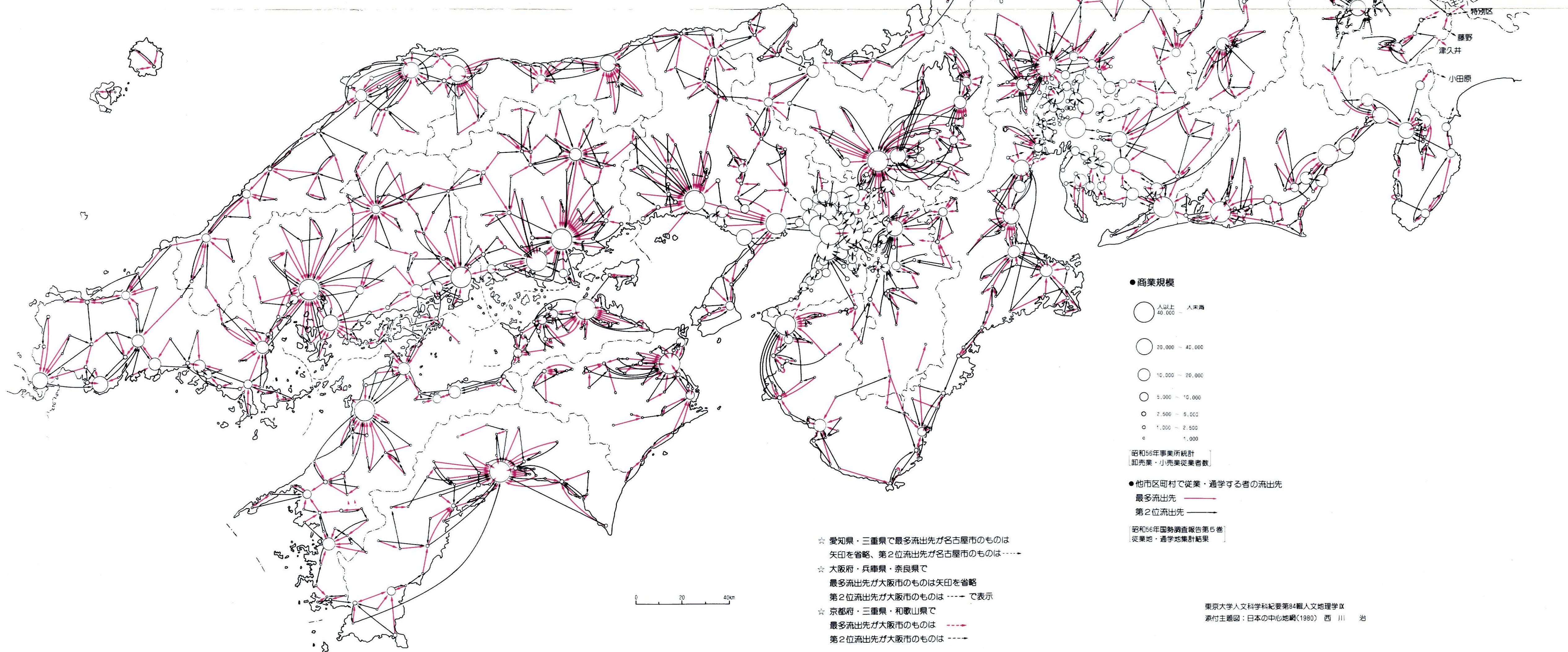
(4) Pc級の都市で周辺に下位の中心地を持つものは、矢印群は「玉突き型」を呈する。

(5) 細長い河谷や盆地においては、上流から下流方向へ矢印が次々に中心地を突く形となる。これを仮に「順突型」と呼ぶ。

(6) 東北地方その他においても、県境が都市群系を遮断している場合やせいぜい二次的に両県側の中心地が結ばれている例も少なくない。

以上のほか、もっとさまざまな都市群系のパターンが見出せるはずである。本図がW.クリスタラーの中心地モデルに必ずしも拘束されずに、比較地誌的見方によって各地域の都市群系を考察する一助となれば幸いである。

(企画・指導：西川 治、作図：奥山育子)



●商業規模

○	人以上 - 40,000
○	20,000 - 40,000
○	10,000 - 20,000
○	5,000 - 10,000
○	2,500 - 5,000
○	1,000 - 2,500
○	1,000

昭和56年事業所統計
卸売業・小売業従業者数

●他市区町村で従業・通学する者の流出先

最多流出先 ———→

第2位流出先 ———→

昭和56年国勢調査報告第5巻
従業地・通学地集計結果

☆ 愛知県・三重県で最多流出先が名古屋市のものは
矢印を省略、第2位流出先が名古屋市のものは -----

☆ 大阪府・兵庫県・奈良県で
最多流出先が大阪市のものは矢印を省略
第2位流出先が大阪市のものは ----- で表示

☆ 京都府・三重県・和歌山県で
最多流出先が大阪市のものは -----
第2位流出先が大阪市のものは -----

日本の中心地網
 4-4
 九州地方の通勤・通学流動図(1980)

